

瞬間と持続

——行の一念を問う——

本 多 弘 之

一

純粹なる持続を離れて瞬間は成立しない。しかし瞬間は必ずしも純粹なる持続を生み出すとは限らない。瞬間と持続とは互に切離し得ないが、その間には超えられない質の差がある。弛緩せる持続の中から純粹なる瞬間を導き出すとする試みがありうるのは、その質の差を認められないからである。我等は、持続の中に持続を破って、持続自身を純粹にするような瞬間を見出さんとする。しかし瞬間はむしろ純粹持続からのみ生まれるものである。

しかして緊張した純粹持続を成就せんとすれば、何としても、円満なる過去現在未来を成就した瞬間というものが現成しなければならぬ。この瞬間の成立には原始の過去より永遠の未来に恒る永劫の持続が必要である。

このような瞬間を切開く為に永劫の如実修行を成就せんとする志願の主体が、法蔵菩薩と名のりをあげた。法蔵菩薩が永劫修行を堪え抜いて切開く瞬間は光であった。光は自身の内に持続せんとする智慧を保持して瞬間の内面に純粹相続のレベルへの鍵を志向する。「五劫思惟」と云われる意味は、「永劫修行」という言葉よりも一層深刻な響きをもっている。法蔵の魂は永劫の時を一念に成就しつつも、純粹なる持続を生み出す為に、単に無限の時間の深淵性

を開くことのみには止まることを許さない。水準の低い無限を以て、持続の具体性を思惟せんとする方便力自身の苦惱を荷うのである。

曠劫以来の闇を破った光に永劫の修行が成就するなら、そこを切断面として光明の世界が、あたかも千歳の闇室を一瞬にして明るみに転ずる如く、現成するという。確かに永劫が一念に現する時の光とは、そのような強烈な力とはたらきを有するものに相違ない。永劫というからには、如何なる断絶をも貫いて連続するものであるからである。

このような瞬間は、内から純粹持続を開示する力を満々と湛えている。永劫修行は今現在十方に持続せずんば止まない。弛緩せる持続の唯中に、緊張せる純粹持続を切開く瞬間を、豊かなる一如の大自然界を開示する源泉たる瞬間として突入せんとする意欲が、行の一念という形を取った。称名という行為のところに、瞬間を開くはたらきを全うした。名において、超時間的なる意味を時間の唯中に表わし、無量劫の時を瞬間に顕現するような難事を実現した。これによって、未来永劫を尽して純粹なる相統を実現しうる原理となつて、人類の灯であることを得る。即ち、『大經』流通分の弥勒付属の一念を行の一念とする意図は、仏道の伝統が方法としての形において与えられるということに明らかになるにある。

大体、方法というものは持続に関係する。「如実修行相応」といい、「願偈総持与仏教相応」といい、純粹清淨なる相統を方法論として問うものである。そこに瞬間を方法として与えるということが理解しがたい原因がある。しかしあるいは、『起信論』のように始覚として一度瞬間をあらしむれば、それは本覚と一致することであるから、その始覚を開く瞬間というところに方法が与えられるというかも知れない。また見道という時に三世を全うした瞬間を現成するから、やはり方法というものは瞬間に関係するのだというかも知れない。

この場合の始覚といい、見道というのは、しかしながら形として与えられた瞬間ではない。方法によって与えられ

る瞬間ではない。弛緩せる持続を、緊張せる持続へと高め、それが純粹持続に飛躍する瞬間をもって見道とか始覚と
いうのであるから、むしろ純粹持続を如何に開くかという修道の究まれる一瞬というべきである。これは行の一念に
対応するよりも信の一念に相当するべき問題なのである。「如実修行相應は信心ひとつにさだめたり」(高僧和讃)と
いわれる所以である。

瞬間を方法として与えるということの意味は分りにくい。それに対すれば、方法を伝統の根拠として与えるとい
うことは比較的分り易い。善導が「順彼仏願故」といいながらも「一心専念弥陀名号」に「行住坐臥不問時節久近念々
不捨者」と相続的表現を用いるのもこの間の不透明さを表わしている。易行難信というが、この難には二重の難があ
ることを知らされる。つまり法然のいう「勝」ということが信知しがたいということと同時に、形が勝であることは
実はその形において純粹持続の平野を呑み尽すような瞬間を与えているということが信じられないということである。
つまり勝は勝劣の勝であると共に、超勝独明の大利であるということが諒解しがたいことであろう。

純粹持続は瞬間を切開く鍵を行として表現した。我等は純粹持続を開示する行に、瞬間のはたらきを垣間見ること
ができた。ところが、弛緩せる持続は一瞬の光によって純粹なる持続に簡単に転ずるといふわけにはいかない。曠劫
より流転せる苦悩の旧里は捨てがたい。弛緩せる持続にはそれ相應の気安さがある。緊張せる純粹持続においてそれと
飛び込みたくないものを残す。それだからこそ、身心を索励して勝なる行を持続せんとするものが出る。行が勝なる
故にこそ、行を持続せんとする。つまり行として与えられたる瞬間を行の持続において純粹持続にせんとする。行の
無限の背景を知らざるもの焦燥、むべなる哉。

大行はすでにして純粹持続を生長するはたらきそのものである。「五劫思惟之攝受 重誓名声聞十方」と云うから
には、無辺の生死海を尽して超十方の光明を行の一念に照明し尽さんとするものである。一念に八十億劫の生死の罪

を除く（観經）というはたらきは、形において無量劫の苦悩に対応して無尺蔵の修行の成果を実現せんとする法蔵自身の願心のはたらきである。法蔵が正覚の形となった名としての行において、罪業の過去と不安なる未来とを貫いて、衆生をしてこの現前の事実無限の付与を楽しませんとする。そこに兆載の修行を現前の瞬間に実現しつつある大行の意味がある。

行の一念とは、名という形をとって純粹持続の原理となった行が、純粹持続の大地から誕生した叫びである。弛み切った日常性の澱みは、日月の光も透らない汚泥にも喩えられよう。これを清淨透明なる純粹持続の緊張に高めることは、如何に強い赤道直下の太陽たりとも為し得ない。一度、蒸発して雲とし、雨川として凝集する自然の道理を見よ。弛緩を緊張に転ずるに、頭燃を払う行も徒労だというのは、純粹持続を開示する瞬間そのものは、自らの内に瞬間を生み出す因を有して、他の雜縁助力を俟たないことを示している。無量無辺無碍というような名は、名自身にそのようなはたらきをもつことの表明である。

しかして、はたらく名は、瞬間の内に持続を生み出すことを表現せんとして「不斷光」の語をもつ。行において瞬間を開くことは、不斷のはたらきの顕現であるというのである。その故に不斷なる行とは、いふなればそれ自身同語反復にすぎない。曇鸞が「心不斷」と讚ずる所以である。純粹持続を能生する瞬間は、純粹持続の具体的はたらきたる行から生まれる。行為の背面に純粹なる意欲があって、行為せざれば止まぬのである。

しかるに、方法においてすでに無限の時を保持する原理としての瞬間を開示しえたとするも、その方法は必ずしも方法自身で成就し終ったものではない。それは、行そのものを持続せんとして、日課七万遍を実行せしめるような問題を残していることを意味する。今の心不斷にしても、先の如実修行相應にしても、持続の原理を行に有するも、その実現の場を行においてしようとするなら、同語反復になつてしまい、現前の純粹持続にならないという問題の表示

である。

ここに親鸞が大行をして真に大行たらしめる為に信心を問題として問うた意味がある。本願成就文の「諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念至心廻向」の訓点に「乃至一念せん」と付し、これを信の一念であると読まれたのは、行為を純化し持続せんとするような過ちを転じて、行が大行としてそれ自身に純粹持続するものの表現であることを明らかにするためであった。

信一念と行一念とは互いに相俟って成立する。どちらもそれのみで他を生み出すというわけには行かない。肉体を離れたる精神は観念であるが、精神を生み出さない肉体は、それは真の生ける肉体ではないのと一般である。

先に持続は瞬間を生み出すも、瞬間は必ずしも持続とは成らないと問題提起したのは、この差異を志向せんが為である。

さて、行の一念について親鸞は「行巻」に「言行之一念者、謂称名徧数、顕開選択易行至極」という。大行が無上大利であることの極まりを顯わすものであるという。更にこの一念は一声であり一行であるという。つまり一念といってもそれは刹那を現わすというのではなく、名のかたちの顕現を一念というのである。

これに対すれば信の一念は、「顕信樂開発時剋之極促、彰大難思慶心也」といわれ、無疑無慮の一心が成立する瞬間を示している。また一方、信心は淳一相統ともいわれ、相統とか相統というものも信の一念との関係において論ぜらるべきものであることは明らかである。瞬間も持続もその意味では、信の問題、広くいえば意識の問題に属するものである。しかし、意識というも、雑染なる心垢の現象ではない。純粹無雜なる世界を欲せんとする究極の至誠心が呼応する意識の瞬間というものは、『涅槃經』が無根の信と示す如く、弛緩せる意識現象の持続から生み出されるものではない。永劫をかけて無仏の世界に願生する菩提心が、不断光仏として現前する事実こそ、純粹持続を表現

し任持せしめる根幹である。信の一念が時剋の極促であるなら、行の一念こそは、その瞬間を開示する純粹なる行の事実そのものである。一行というは、形において形なき願いを表現し、形を通して形なき世界へ呼びかける法蔵菩薩のためまざる活動そのものである。瞬間というも現前の具体的な事実以外にはない。事実の内容が完全に広開される瞬間こそが、信の一念といわれるのであろう。而して行の一念の真意は信の一念を俟たずしては、凡そ無意味なる反復になる。信の一念において反復は無意味から突如として無限無量の意味を開示する大行に転じてくる。凡そ無意味なるものの有つ大いなる意味は、それに対応する精神の開けに俟つほかないものであろう。

二

行の一念とは、かたちにおいてかたちなき無尽の法界を開示せんとする法蔵の獅子吼である。しかして形となって形を破るものは、瞬間において持統を頭わすことと同業でなければならぬ。雄叫びは静寂を破るところにその崇敵なる所以がある。日がな一日うなり続けるサイレンの如きものは、喧噪をもたらすのみである。しかし「称名の徧数について選択易行の至極を顯開す」と云われるように、時の中に形を表現するには反復という問題を避けえないのである。

かたちは一形で既に完全円満なる真理を実現しているのでなければ、純粹持統の原理となることはできない。だからこそ別時意の論難をくぐって浄土教が独立せねば止まなかつたのである。「順彼仏願故」の確固不動の信念を通して、万善円備の名が独立の根柢となるのである。「一念は功德のきわまり、一念に万徳ごとくそなわる、よろずの善みなおさまるなり」（一念多念証文意）といわれる所以である。一念はすでにして仏道成就の瞬間である。行の一念というかたちにおいて信の一念が成就する。かたちが完成しているからそれに如実相應して信心が成就しうる。完

成した形において完成せる精神が誕生しうる。にもかかわらず、かたちをとる限りかたちは次のかたちを要求する。一度のかたちで内容のみが持続するということはない。

「称名の徧数さだまらず」「多念をひがごととおもうまじき」(一多文意) いわれがやはり存するのである。これはしかし未完成なるものを積上げて完成品にする意味ではない。一念に成就したままに、かたちがかたちを呼ぶ。完成したものが完成したものを呼ぶ。獅子吼が獅子吼を呼ぶのである。

しかしながら形において瞬間を開示し、その瞬間が純粹持続を既に有して連続するということになる、形が止むときは連続が途切れることにならないか。純粹なる持続を創造する精神を内に擁しているとはいっても、かたちである限り、かたちが無ければ内容もないのではないか。さすれば、行住坐臥、寝る間も惜んで称名しなければ、完成せるものが完成せるものとして持続するということは実現しえないではないか。

この難を乗越える為には、一念の開く純粹持続とは一体何であるか、行の一念が完成したものととして、末代の衆生に与えられたということの意味を明らかにしなければならぬ。

そもそも行の一念、信の一念というは、我等凡夫の上に実現せる願成就の瞬間をいうのであるが、現前の事実がそのまま連続することを要求するなら、それは一時に究極的な法性そのものの現前にまで及ばなければならぬ。わざわざ散乱せる我らの意識と行為との上にこそ、この法性の世界を表現せんとするのが行の一念である。それを我等の行為及び意識における法性そのものとして持続させようとするのは、すでに方法が間違っているという外ない。瞬間というも持続というも、その実現せる事実の根拠に尋ね入ることによってその意義を開発して来なければならぬと思う。

かたちがかたちに連続するのではなく、かたちとなった精神が歴史を貫き、時処所縁をへだてず連続するというので

なければ、かたちがかたちを呼ぶことはできない。その意味では、法蔵菩薩の永劫修行のみが眞の連続である。神話のみが純粹持続である。神話が響流する始源の時にのみ緊張する持続が活動する。

されどこの純粹持続は我等の上に形かたちられる行の一念と別ではない。行の一念は法蔵菩薩の苦吟である。また獅子吼である。我等となつて我等を救うはたらきである。

法蔵が正覚を取ることが単なる神話として現実とは別の世界の物語りであると考えるなら、神話の世界と我等の間は無限に遠い。神話を冷然と眺めるものにとつては、神話は遂に神話でしかない。

法蔵精神が眞に純粹持続をもちうるのは、無限の過程である無上仏道を永劫修行しうる確信を把んだところにある。五劫思惟を通して選択摂取した「かたち」、この形を発見したところに持続が瞬間を生み出し得たのである。

法蔵因位の修行と正覚の名告りが神話的事実としてあつて、しかも我等がそれに参加するという考え方に立つとき、神話の世界と我等の行とは、行きつ戻りつという関係になる。歴史の始源の瞬間に我等は行において参加し、行を離れるとき我等は末代濁世の唯中にいる。つまり行の反復によって永劫に回帰しつつ神話の世界とこの煩惱汚濁の境とを往復する。「称すれば仏願の体にかえる」という考えがこれである。帰るといふことは出ることによる。出ているから帰っていく。帰ればすぐまた出る。一念に正覚に帰るといふ。帰るけれども帰り続けるといふことはありえない。故郷は遠くにありて思うものと云うが、帰るといふことは、「帰去来」の願いに意味がある。帰ってみればまた出ざるを得ないものである。さすれば「兆載永劫の間、無善の凡夫にかわりて」修行するといふ限り、法蔵菩薩と凡夫との間は永劫回帰を繰返すほかない。

無限の距離を一挙に超えて往復するような繰返しは、「法蔵菩薩は我なり」ということよつて始めて止むことができる。如来が我となるとは、神話が現実と成つて来ることである。神話はあくまで神話であり、現実はどこまでも

汚濁の現実である。しかしその間に参加という関係ではなく、神話が現前の事実となるような関係が成立するのが、純粹なる持続の現前の事実たる瞬間を開く行の一念である。現前にかたちを取って開示した一念に、神話が現実となる。法蔵菩薩の永劫の修行が完成する。無限に未完成なるものが完成する。永遠に未完成なるものは神話である。完成したというのが瞬間である。完成したままに未完成であるのが持続である。無上仏道の志願は完成し終るといふことがない。常に初一念である。しかし単に未熟なのではない。やはり念々に完成している。法蔵が正覚を取らなければ名とはならない。至徳成満せる名は、完成せるものである。その上に何らかの付加を要求しない。

一歩一歩が未完成のままに完成しているということは、行ったり帰ったりする回帰の思想ではない。未完成なるものを完成に到らせる進歩の思想でもない。未完成のままに完成しているということは、往くことが還ることである。還ることのほかには往くことはない。往くことが還ることによって成立する。帰ってから出たり、出てから帰るのでなく、入ることが入ることである。入ることが実は出ることである。神話が現実となるとは、現実が真に神話の場となることである。神話が真に神話の純粹性を發揮するのは、現実の汚濁を照らすときである。現実の汚濁の外に、法蔵が五劫の時を費いて苦悶する場はない。現実の苦悩が尽きざるところにこそ、純粹持続の根があるのである。散乱變動のところこそ純粹持続がはたらくのである。十劫の正覚は未来の罪業の凡夫を呼ばんが為である。永劫の修行は曠劫已来常没常流転の群生を目覚まささんが為である。

現前の一念は単なる瞬間ではない。無尽の法界に入る道程である。一歩一歩は往生の生活である。無限に終熄することなき道程である。それは、忙がしく往復する事務的な旅行に比すれば、悠々として着くところを知らざる遍歴の旅である。「念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず」といえるのは、未来を畏れる必要がない確信があるからである。「とても地獄は一定すみかぞかし」というところに確定した持続の根が発見されているからである。

行ずるといふことが瞬間であるとすれば、持続は行が行に連続しなければ生じない。しかし行は行に連続しつづけることはできない。想えば、行は瞬間ではなく、瞬間を生み出す方法なのである。

それを明らかにする為には「至心廻向」を訓みかえて、「至心に廻向したまへり」と訓まざるを得ない。行は純粹持続の大地から生まれて瞬間を開示する噴火口である。あるいは、純粹持続のはたらく場たる卑湿の汚泥から生まれて、自然の大地の持続を象徴する白蓮華である。弛緩を緊張に高めんとする努力としての廻向が瞬間を開くのでなく、純粹持続そのものが自己をあらわすところの廻向が、瞬間を開くのである。瞬間が持続を創るのでなく持続が瞬間を生み、それによって瞬間が神話の現前たる廻向を証明する。

信の一念は、行の一念において具体化し内実化し、行の一念は信の一念によって眞実の行としての一念たりうる。一心も相統心も信の問題であるということは、行がその何れの根拠をも開示しているということではなければならない。具体的な事実としての行のところに、その背景としての純粹持続を問わざるを得ないのである。

三

行の一念は瞬間ではない。瞬間というなら、時剋の極速たる信の一念である。「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつころのをこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり」という『歎異抄』第一条の「おもひたつころ」は信の一念であるといわれる。それは「そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなざよ」という第十九条の「おぼしめしたつ」に対応して、一念が「発起」という意義をもつことを表わしている。「信巻」の序の「獲得信樂発起自如來選択願心」を見ても知られるように、信は「発起」として「発」り「起」き上って来る瞬間を一念と

してもっている。それは同時にその瞬間を生み出してくる純粹持續をも信の原理に有っていることを示している。如来選択の願心に帰るなら「至心信樂欲生」として、我等に呼びかける「生れんと欲へ」という勅命を信心成就の原理に有している。

それに対して、行をも一念として押えようとするならば、その原理として「乃至十念」という形の繰返しを表わす言葉を本願の中に有するに過ぎない。「念仏まうさん」という行の一念は、それ自身では瞬間とも持續とも理解しうるし、またそのどちらでもないとも考えられる。同じ一念というが、行の一念は「一念」といわれる内容から瞬間という意義を没失して、一つの形つまり「形無二行」（行巻）という意味に換骨奪胎して、いわば化石の如く、あるいは「臍」の如く「念」を殘存しているようである。

それを信の一念の場合の念と同意に理解すれば、どうしても行を連続させるか、一度の行為で能事終れりとするかの何れかに決定せざるを得ないわけである。一念義あるいは多念義がそれぞれ自己を主張する所以である。親鸞は非多念非一念（信巻）として何れをも否定するが、またどちらも「ひがごとにあらず」（二多文意）といって肯定している。一念は一行であり一形であり称名の偏数であるから、一念か十念かということは、それ自体として決定され得ないという立場である。

そういう為には、行というものは瞬間と持續という時間性の領域から何らかの意味で独立していなければならない。もちろん一念といわれ十念といわれる限りにおいて、完全に瞬間と持續から超脱するものではありえない。行信の一念は互いに単独では考えられないものであるからである。しかし逆にいうなら行の一念から信の一念が分立して来なければならぬという点も注意しなければならない。行の一念の中に信の一念の意味を包摂してしまっている限り、瞬間から持續を導出しようとして、行を不断に連続せしめようとするであろうし、信の一念の中に行の一念を吸引し

てしまふ限り、持続は不必要であるということにならう。瞬間のみが現実であり、そこに一切は完結するといわざるを得ないからである。

行の一念が信の一念から分位する為には、行の願が信の願から独立するということがなければならない。親鸞が第十七願を大行成立の根本原理として標榜したのは、行が乃至十念という曖昧なあり方から、二形なきかたちとしての一念とならねばならないということによる。

しかれば信の内包たる「瞬間と持続」の問題に対して、行の一念はどのような関係をもちうるのか。

「かたち」をとるとは表現することである。名告るとは、自己自身を語ることである。瞬間をして瞬間たらしめるものは、その内容にある。形式としての瞬間ではなく、持続を内にはらんで念々に持続から誕生して来る瞬間は、表現をもたなければならぬ。

瞬間と持続という時間性の概念をいま仮りに直線に準えて考えてみよう。直線は持続に当る。直線上の点は瞬間に当る。その場合に点が動いたものが線か、線を切断したものが点か。点が初めか線が初めか。私は線が無ければ点が生じないと思う。点が動くというのは、線を予定して始めて点が動きうるのである。これを、持続は瞬間を生み出すが、瞬間は必ずしも持続を造り出さないとするのである。

しかるに線から点は如何にして生れるか。真に独立した一点は線から帰納的に出てくるものではない。無限にその点に近い点もその点そのものではない。そのような点は、切断の考えによってしか表わせない。切断された一端は、他の一端に無限に近く、しかしながら異なった点である。一点を二分するわけには行かない。分けられるものは二点である。そのような一点を生み出す切断を、法蔵菩薩の五劫思惟は、行の一念に発見したのではないか。

法蔵菩薩は、兆載の持続から一瞬の極まりを生む為に、一法句を選択した。そこに永劫の苦悩を切断する方法を顕

現した。尽十方に無碍なる光として自己を表現した。そのはたらきはすでにして持続でも瞬間でもない。純粹持続の神話から現前の自己に瞬間を開かんが為に、永劫の闇を破って光明の広海を見出さんが為に、自己自身の連続性を切断したのである。永劫に比すれば下位の無限である五劫をもって選択しなければならぬということの意味が深刻であるといえるのは、この為である。純粹持続は瞬間を生み出す為に自己を切らねばならない。自己を切る刀は、しかし自己ではない。自己を切る刀が自己であるなら、瞬間は絶対に生まれない。また瞬間が純粹持続を開示することもできない。面が線を切るのは、面にその線が乗ることが出来ないからである。截断の刀とは、第十八願に対する第十七願である。信の一念に対する行の一念である。

曠劫来流転の浅薄なる愚夫は、純粹なる神話の精神にほど遠い。神話は神話として描かれることに自足しなければならぬ。我が如来と成ることは、絶対でありえない。我はどう逆立ちしてみても所詮、凡夫でしかない。

兆載永劫の純粹持続は、設我得仏の悲願を成就せんが為に、流転を截つて瞬間を顕彰せんとする。瞬間を生む為には一旦持続を断たねばならない。断つことによって異質なるものの中に瞬間あるを示すことができる。純粹無雜の瞬間は、弛緩せる持続を緊張させて生まれるものではない。かと云つて純粹持続から自出してくるものでもない。純粹持続が自らを断つて新たな自己として誕生するものである。截断することによって真に自己を自覚して行く。截断によって発起した瞬間は、純粹無垢なる持続と異質なるものになったのではない。断つことによって質を転じたのではない。截断をくぐって顕出した瞬間は、異質なるものの中に純粹持続を出来せしめる。如来となることなき自己の上に、真如が来る（如来が自己となる）ことは、根源的な純粹持続がそこに突出することである。

法蔵菩薩が深い思惟を潜つて雄叫びを上げたことこそ、積尊をして自用法楽から転法輪に発ち上らしめた源泉である。理解しえないものを理解させずば止まない法性自身の表現の欲求である。純粹持続が「このこと云わずばある

べからず」と、沈黙を破るのである。これこそ、異質なるものの中に、自己を表現せずば止まない大悲心の、自己自身の骨肉を切り与えるごとき截断の行為である。

従ってどこまでも瞬間を顕出させるはたらしきとして「一念」という残渣を残さざるを得ない。それは同時に、形が形に連続しようとする十念の希求を残さざるを得ない。これは不明朗のようではあるが、これを払拭して明朗になるものでもなからう。領域は判明しているが、為すべき事業が非常なる難事なる故に、未有一人得者の関を越えんが為に、形をあらわし、その形の一形に信が成熟しうるのを待つ為に、行の一念ということを付属するのであらうと思う。

行が行であるからには、持続と瞬間に關係する。しかも直接的にその両面を行において充足しようとするれば、行為自身の意味を明確にすることはできない。行為の内面を開示して精神界を公けにしなければ、瞬間も持続も、神秘的な世界、神話的世界に終らざるを得ない。行が打坐の如き一形でなく、一念というかたちをもつて瞬間の香りを残すのは、持続が瞬間を生むものであることを示す為である。瞬間が初めてなく、瞬間を開かしめる根に持続がある。持続とは永劫修行に象られる法蔵菩薩の精神である。因位の名を断つて果上の号となると瞬間が開けうる。この瞬間こそが純粹持続の自己表現である。従って、名のつたままが不断光仏である。断絶を超えて一貫して連続する菩提心の現行である。行は信を別開することによって、大行であることを明らかにした。それは、行が一念であつても非一念であり、自ずから多念であつてしかも非多念であるということが云いうる為の苦惱の別離であらう。分れずしては自己を成就できないという悲しみに堪える強さにおいて、信の一念が眞の時の成就としての瞬間となつて時剋極速たるをうるのであらう。殺人劍活人刀とはこれである。

願海は無論不可思議である。現前の自己とその境遇、そこに動乱している現実は愈々不可思議である。不可思議が不可思議のままに自己を形にあらわさんとする。これこそは全く不可思議の極みである。